



課長 齋藤 健司
係長 振興 齋藤 健司

*今月号は私が担当しました。

麦類の赤かび病について

麦類の赤かび病は、小麦や大麦の穂に発生する病害であり、人畜に有害なかび毒の一種である「DON（デオキシニバレノール）」を産生します。赤かび病が多発すると、収量や品質が低下するだけでなく、国が定めた基準値を超えてしまうと流通も禁止され、同一ロットは全量廃棄処分となります。そのため、食の安全性確保という観点からも、防除が欠かせない重要病害となっています。

赤かび病は、最高気温が15℃以上かつ最低気温が10℃以上で、湿度80%以上、または降雨日及びその翌日という気象条件の揃った日が、赤かび病の「子のう胞子」が飛散しやすい好適日とされています。令和6年産の麦は、この好適日が過去10年で最も多くなりまし

た。特に、11月下旬以降に播種した小麦が最も感染しやすい開花期と重なり、各地で感染が確認されました。

J A ふかや管内で、主に作付けされている小麦品種【さとのそら】は赤かび病の抵抗性が、「中」となっていますが、決して油断はできない為、令和7年産についても引き続き注意が必要となります。

○小麦の赤かび病防除の目安

赤かび病の防除で効果が高いのが、薬剤散布による適期防除です（下記表）。

〈散布時期〉

小麦の穂が開花を始めた時期から開花期（1穂につき数花開花しているものが、全穂数の40%から50%に達した日）が散布の適期です。

赤かび病の防除は、適期に正しく散布できたかどうかで効果が大きく変わります。基本的に防除は降雨を避けて実施しますが、防除適期に降雨が多く、雨を避けて行うことが困難な場合には、短い晴れ間を利用したり、ごく弱い降雨の時に実施したりするなど、適期での散布を優先することも必要となります。また、県による発生予察情報、天気予報を参考にし、出穂期頃から圃場を巡回するなど生

育状況を把握し、場合によっては追加防除を実施して適期防除に努めましょう。

表 麦類赤かび防除の薬剤例

農薬名	作物名	使用時期	使用回数	無人航空機散布対応
トップジンM水和剤	小麦	収穫14日前まで	出穂期以降は2回以内	—
トップジンMゾル	小麦	収穫14日前まで	出穂期以降は2回以内	○
チルト乳剤	小麦	収穫3日前まで 収穫7日前まで (無人航空機による散布)	3回以内	○
ミラビスフロアブル	小麦	収穫7日前まで	2回以内	○

※必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守りましょう。

●適期収穫の実施

赤かび病の多発が懸念される場合は、薬剤散布が基本となりますが、以下の対策も重要です。

刈遅れにより降雨に遭遇すると、

●倒伏圃場の別刈り

圃場で倒伏が見られる場合は、赤かび病粒混入防止のため、健全な麦とは分けて収穫しましょう。左図のような著しい倒伏圃場は、赤かび病発生リスクが高くなるので、収穫前に共同乾燥調製施設へ相談をお願いします。



図：小麦の著しい倒伏圃場写真

●収穫後の速やかな乾燥

収穫後、速やかに乾燥させないと赤かび病菌が増殖する危険性があります。個人乾燥の方は、収穫した麦を可能な限り速やかに乾燥機へ投入し乾燥させましょう。